

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲	第	号
------	-----	---	---

氏名 中原理絵

論文題目

Treatment outcomes of definitive chemoradiotherapy for
patients with hypopharyngeal cancer

(下咽頭癌患者に対する根治的化学放射線治療成績)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主査委員 中島務
名古屋大学教授

委員 安藤雄一
名古屋大学教授

委員 後藤秀実
名古屋大学教授

指導教授 長崎恒二
名古屋大学教授

別紙1-2

論文審査の結果の要旨

化学放射線治療 (CRT) は切除不能頭頸部癌の標準治療となっており、切除可能局所進行頭頸部癌に対する治療のオプションの一つにもなっている。そのため臓器温存目的で CRT を行う患者の数は増えている。様々な化学療法のレジメンが報告されているが、同時化学放射線治療 (CCRT) が標準治療とされている。しかしながら、根治的化学放射線治療の治療結果について詳しく検討した報告は極めて少ない。

本研究は下咽頭癌患者に対して根治的化学放射線治療を行い、その臨床的な効果を評価する目的で、治療結果を遡及的に検討した。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 本研究において、FP (5-FU,CDDP) 療法による導入化学療法 (ICT) 群は非 ICT 群よりも 5 年の全生存率、無病生存率、局所制御率は低い傾向にあった。しかしながら、現在は FP 療法より強力な ICT である TPF(TXT, CDDP, 5-FU) 療法が出現し、2013 年に報告された PARADIGMS trial では CCRT と同等の良好な治療成績が報告されている。局所進行頭頸部癌治療において、ICT はその後の放射線治療で根治可能かの評価と救済手術時の重篤な副作用を避けるために用いられており、TPF 療法の出現によって ICT は今後も進行癌の根治治療としての適切なアプローチの一つになりうるを考える。

2. 現在、頭頸部癌治療における放射線療法は CDDP を併用するのが標準的であり、CDDP が使用できないような高齢者や腎機能の低下した患者に対しては、以前は放射線単独治療を行っていた。しかしながら分子標的薬であるセツキシマブが出現し、このような患者にも使用が可能になり、新たな治療法の選択肢が広がっただけではなく、放射線治療との併用により生存率の改善、局所制御率の改善をもたらした。

シスプラチニ併用群とセツキシマブ併用群との比較試験は現在進行中であるが、生存率がシスプラチニ併用群と変わらないのであれば、今後はセツキシマブ併用放射線治療が増えていく可能性が示唆される。

3. 多変量解析にて T-stage が唯一の予後因子であり、局所制御の向上が今後の下咽頭癌の治療成績の向上につながることが示唆された。今後局所制御率の向上のためには高精度治療の標準化による、標的体積への線量の均一性や治療精度の向上、また放射線治療抵抗性の低酸素がん細胞の局在を可視化する手法の開発その放射線抵抗性がん細胞に高線量の放射線を集中照射するといった biotherapy の技術開発が期待される。

4. 化学療法の併用、放射線治療技術の向上、治療中の患者の栄養管理が治療成績の向上につながったと考える。

5. 化学療法との併用により、下咽頭癌における放射線治療成績は向上し、進行癌であっても喉頭温存ができる可能性が示唆された。副作用の点でも、放射線治療技術の向上や治療中の栄養管理を積極的に行うことで、化学療法併用であっても毒性を増加させるこどなく治療が行えたと考える。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	中原 理 絵
試験担当者	主査	中島務	安藤雄一	後藤秀実
	指導教授	長崎川山		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 今後の導入化学療法の意義について
2. 分子標的薬の位置づけについて
3. 放射線治療の今後の展望について
4. 治療成績が良好な要因について
5. 放射線治療の効果と副作用について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、量子介入治療学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員会議の上、合格と判断した。